
サバイバル ―醜き人の性―

モコナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバイバル ―醜き人の性―

【Nコード】

N8816I

【作者名】

モコナ

【あらすじ】

人間の醜さを描いた作品です。

中には愛もあふれていてとても深い作品になっています。

必ず泣けます！！

塾の帰り、突然誘拐された祐策ゆうさくに待ち受けていたものは・・・
死のゲームだった。

恐怖と戦慄のデスゲーム！お楽しみ下さい！！

作戦？0 プロローグ

2049年。世界的な大恐慌により、世界の発展は遅れていた。

2009年となんら変わらない世界。変わらない世界の中で一つだけ変わったものがあつた。

それはやさしさである。食糧不足により、人々は飢え、苦しんでいた。その中で、仮に人

類が残っていたのなら必ず教科書に載つたであろう事件が起こつた。

テロリストによる人口削減運動である。

人口を減らし、働き口を開け、食糧を確保しようというのである。

その中で人は醜く、それがもつとも美しかった。

恐怖・絶望。その先にある希望。

運命は変えられる。

人生は変えられる。

それがゆえの憎しみ。

人類はもう、この世に必要無いのだ。

作戰開始

作戦？0 プロローグ（後書き）

是非読み進めて下さい！！

夜寝れなくなりましたが、当社は一切の責任を負いませんので
笑）

作戦？1 別れ

ん・・・・・・・・・・？ここは？

鉄、鉄、鉄。鉄でできた部屋だ。祐策^{ゆうさく}はとてつもない恐怖に襲われる。

そう。彼は拉致されたのだ。

「ああー。疲れた。」

祐策は友と共に学校から帰っていた。今日は三日ある高校の定期テストの二日目だ。だから部活は無かった。

今一緒に帰っているのは五人。サッカー部の高島^{たかしま} 隆太^{りゅうた}。隆太と同じサッカー部の山下^{やました} 和史^{かずし}。中学校のころから隆太と一緒にサッカーをしている。地域のサッカークラブで全国大会に出たこともある。

陸上部の月野上^{つきのうえ} 拓也^{たくや}。彼も全国大会ベスト八だ。ちなみに競技は走り幅跳びとハードル。飛ぶのが好きみたいだと皆思っている。普通に走っても速いし、女子にモテモテだ。

この中でただ一人部活動を行っていない者。怠け者のおデブ熊野^{くまの} 弘明^{ひろあき}。

この中で古くから知りあっているのは祐策と和史と隆太だけだ。他の二人とはこの花見高校で出会った。

始めは皆対して親しく話していた訳ではなかったのだが、昨日の晩飯何だった？って話を祐策と和史がしていたら他の三人が入ってきた。

それから一番可愛い女優は誰だとか、椎茸^{しいたけ}は食い物だとかただのカビの仲間だとか、他愛もない話をしているうちに親しくなった。

「うわぁーん。お腹すいたよ。」

弘明が泣きそうな声で言う。何時何処にいてもお腹すいたばかり言う。

「てか、お前の胃袋いくつあんだ？」

祐策の言葉。祐策は剣道部だ。二段の腕前を持っている。

皆がドツと笑う。

「明日でテスト終わりだよね？」

和史だ。

「そうじゃね？確かそうだったと思う。」

拓也だ。テストでは何時も赤点。全くテストに……いや、勉強に対して感心がない。

「はぁー。今から塾行かないと。」

隆太がだるそうに言う。この中で常に八十点以上をテストで獲得する優秀者は祐策と隆太だけだ。他の人は……二桁取れればいいんじゃないか？

「じゃ、僕はここで。」

髪の毛は頭に張り付いて海苔みたいな弘明の家は一軒家だ。しかも高級。いいとこのお坊ちゃんだ。目はデカイ顔中で見ると小さいが、普通の顔なら大きい方だろう。

鼻は低いが、痩せたらなかなかカッコいいのになと祐策は思う。

「おう。じゃあな。」

「バイバーイ。」

適当にいつも通り分かれの挨拶を交わした。

「オレも帰るぞ。じゃあな。」

拓也が家に帰る。何時も祐策は思う。オレは一番学校から家が遠い。最終的に一人になるのだ。不公平じゃないか？

「うん。じゃあな。」

「僕もかえるよ。」

和史が言う。手を祐策と隆太は振る。しばらく二人は黙って歩いた。真っ赤な夕日が目に入った。

——おかしい。いつもはこんなに夕日に見とれたりしないのに。

祐策が空を見上げていると、隆太は彼に声をかけた。

「どうしたんだよ？おい！祐策！！」

ハッと、祐策は気を取り戻す。

「悪い悪い。何でもないよ。」

——何なんだ？妙に胸騒ぎがする。後ろに人がついてきているような……………。

祐策はパツと後ろを振り向く。誰もいない。よくあることだ。テストの疲れが出たのだろう。あと一日で終わりだ。その後はゆっくり休もう。

「オレも帰るぞ。」

隆太が家に帰った。オレは隆太に挨拶をする。最後の挨拶とは知らずに……………。

作戦？2 誘拐（前書き）

誘拐された祐策はとんでもないゲームに参加することに。
最後まで生き残れば妹を救うことができるかも知れない。

条件は人を殺すこと……。

人の本性が明らかになるサバイバルゲーム！
開幕！！

作戦？2 誘拐

「出してくれ！何なんだよ！！！」

祐策は叫ぶ。全て鉄の部屋だ。窓もない。家具なんか何一つない。

——くそつ。オレは誘拐されたのか！？もう……。ここで死ぬのか？

祐策の胸の中に不安が募る。体がまともに動かない。震えにより鉄と体がぶつかり、カツカツという音がする。

昨日家に帰った覚えはない。一人になったときに襲われたのか……。祐策はここまで冷静に考えられる自分に驚いた。きっとまだこの状況を完全に理解できていないのだ。

ドッキリ番組のなんかならう。

しかし、現実には祐策を裏切った。

ガチャッ。カギが開く音。鉄の空間に響く。ギギーと鈍い音を立てて扉が開く。

「機嫌はどうだ？」

部屋に入ってきたのは丸坊主の厳つい男だった。眉毛がなく、頭には無数の惨たらしい傷跡が沢山ある。年齢は四十歳くらいで、筋肉質だ。

「こゝここから出して……く、下さい。」

祐策は喉の奥から声を絞り出す。

「ああん？ハッキリ話せや！」

祐策は横っ腹を蹴飛ばされる。

「ゲホッ！ゲホゲホ。」

男は祐策の髪を掴み自分の顔の前に持ってきた。

「ヒヤハハハ！苦しみ、もがくがいい。他の命を犠牲にしてなっ！
後に後悔することになるだろうよ。」

「出してっ！」

「ハハハハハ！ちょっと待ってる。すぐに出してやるさ！」

男はなにやら小声でトランシーバーに向かって喋ると、祐策に言い放った。

「来い！」

祐策は黙って起き上がり、男について行く。

今日は何でもない一日だった。何でこんなことに……何で……

何で？

「祐策！起きなさいよ。」

母が祐策を起こす。しかし祐策は起きない。今は秋。冬が近いだけあって、少し寒い。だから布団から出たくないのだ。

「学校遅刻するわよ！」

「うるさい。」

母は祐策を引っ張り出そうとする。しかし祐策は中学二年生だ。既に母親より力は強い。

「ちょっと。お父さん！」

父親を呼んで起こそうとしたのだろうが、父親は出てこない。まだ寝ているようだ。

全く。この子は何時になったら自分で起きられるのかしら？と母は思う。

「お兄ちゃん？」

妹の晴海^{はるみ}だ。

「ほら。晴海も起きてるじゃない。お兄ちゃんがだらしないわよ。」
「別にお兄ちゃんという響きに感動して異様に弟や妹の面倒見が良くなる訳じゃないから。」

「屁理屈ばかり。」

「ほら。父さんも……ふあゝ。起きたぞ。」

祐策は仕方なくゆっくりと起きた。

祐策は扉を出る。鉄の通路。通路の両脇にはいくつもの扉がある。本当に誘拐されたのだと、祐策は改めて絶望する。

「扉を開けてみる。」

男が言う。祐策はゆっくりと扉を開く。

——そこに広がっていたのは、遊園地だった。やっぱりドキリだったんだ！

祐策は喜びに浸る。それを見ていた男は、そうはしゃいでいられるのは今のうちだけだと、ほくそ笑んだ。

「ドキリ……ですよね。」

「違うな。思う存分この遊園地で遊んでもらう。その後は海遊館、温泉など色々なプランを用意している。」

男は意外にもスーツを着ている。

「オレは柳^{りゅう}。地獄の案内人だ。」

「へ？」

何を言ってるんだこの人は。

今祐策が立っているのは遊園地の中だ。祐策はトイレから出てきた。

「まずは観覧車だ。」

祐策は言われるがままに観覧車へ行く。

「貴様は主役だ。斎藤の話を聞け。」

と言い残して柳はどこかへ行ってしまった。

マグカップの方から中年の男が歩いてくる。オレの前まで来るとはにんだ。さっきとは打って変わって優しそうな人だ。

「こんにちは。山口テレビの斎藤です。今からあなたには番組に出してもらいます。」

やっぱり！テレビ番組だったんだ！

「どんなですか？」

「殺し合いです。本気の。」

祐策の頭から血が引く。

「ドツキリ……………ですね。」

「いいや。各競技最後の一人になるまで殺し合ってもらう。不正を行った者にはスナイパーに狙撃してもらう。」

確か聞いたことある。山奥の遊園地。そこに行った者は決して帰ってこれないと……。

ただの噂だと祐策は思っていた。しかし今、証拠となる現場を目撃した。

観覧車は血で染まっている。どのアトラクションもだ。全て血で……染まっている。

「信じてもらえるかな？」

祐策は自分を、どうせ演出なんだからびびるな、と励ましてから観覧車に二人で向かった。不安が祐策の胸を締め付ける。恐い……ここから逃げ出したい！

「こんなものやりたくありません。」

「無理だよ。」

「嫌です！」

斎藤は祐策の頭に拳銃を突きつけた。

「じゃあ死んでもらうよ？」

「主人公を殺せるんですか？」

「良い度胸してるな。気に入った。だが、主人公などまた探せばいいんだよ。」

だったら参加するしかないのかよ。

「家では妹が待っているんだろ？ほら。これを見なよ。」

斎藤の手の中にあつたのは『万能薬』と書かれた粉薬。

「この薬は万能薬ではないが、分かりやすいように万能薬と書いてある。君の妹の病気を治すことが出来るよ？」

「嘘だ！」

妹は病気だ。余命は三年と聞かされているが、もっと短いだろう。病名だつて聞かされていない……。

「本当さ。エアウィルスプログラムにより免疫を強制的に強化する。適応速度を急速に上昇させ、白血球を増加させる。その後白血病を防ぐ為に新薬であるバターニユを配合している。三十分後に効くんのだ。免疫によって病原菌が体内から完全に削除され、白血病発症するのが十分間で終わる。それに加え、全身の細胞を半年で全て新しくする指令を脳に出させる効能もある。」

二千五十年の今、山口テレビは強大な権力をふるっている。情報化によってテレビ局の需要があがった為だ。金は余っていたはずなのにあまり給料は多く無かったという。薬の開発費にあてていたのか？

「信じようが信じまいが、君の勝手だがね。最後まで残っていれば薬をその人にプレゼントするんだよ。」

「生き残ればいいんだな？」

「その通りだよ。他の人を殺してね。」

祐策は何故かその時笑った。恐怖はどこかへ消えていた。ただ、殺意、希望、自身。そんなものが溢れていた。

「みなさん！集まって下さい！！」

元気のいい女司会者がマイクで叫んだ。

作戦？2 誘拐（後書き）

ゲーム
作戦が今、始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8816i/>

サバイバル ―醜き人の性―

2010年10月8日22時45分発行